豪商の物語り

「栃木の商業と金融」

栃木商工会議所

はじめに

栃木の三大豪商※の逸話を語る人も少なくなった。残ったのは山車だけだ。だが、山車は何も語らない。いま思うに、戦前の最盛期は明治40年頃だろう。この年、旧第二小学校の校庭に、20台の山車が勢ぞろいした。いまなら1台1億円と云われる山車を入舟町・湊町・祝町・泉町が買い求め、巡行したのだ。昭和天皇が皇太子時代の話だ。おらが町にも山車がある。それを見て大通りに負けるものかという意気地が燃え上がり町は一体化したのではないか。秋まつりが来る。山車を追えば豪商たちの声が聞こえてくる。

※栃木の三大豪商

◎釜芳　伊藤芳次郎　倭町の肥料商・砂糖商、大正時代には全国に16支店を展開していたが、統制経済になるとネットを奪われ、綿投機で失敗したと云われる。

◎釜金　大塚金兵衛　室町の呉服商・金銭貸付業。6代目金兵衛は33歳で栃木商業会議所の会頭に就任した。第四十一銀行監査役・栃木商業銀行頭取・加満屋銀行頭取を歴任。

◎釜佐　善野佐次平　江戸時代からの大質屋。明治37年に家督相続襲名し栃木倉庫銀行の監査役・小山銀行監査役に就任。大正14年には富源無尽㈱（現在の栃木銀行の母体）を創業した。

豪商の富は歌麿を呼び寄せ、豪商の街の衰退で一村は栃木を去った。その間の百年余、豪商たちは栃木の大通りをどんな表情で歩いていたのか。大火に見舞われ、何度も水害に襲われ、三つの戦争で大損したり大儲けをした。世界恐慌という理不尽と思える経験をし破産した。そのたびに幾人かの豪商が大通りを去り、その跡に新たな豪商が店を構えた。

豪商は勝者であった。しかし、古来、栄華は夢である。敗者となれば負けはしなかったが勝ちもしなかった人々にその毀誉褒貶（きよほうへん）を委ねるだけである。いま豪商について何が語りつがれているのか。彼らは派手にやりすぎたのだ。子供たちよ「投資には熟慮に熟慮を重ねよ」「余所者を信用するな」という家訓がいまも支配しているのなら、これこそ豪商たちの負の遺産であろう。戦後71年のいま、豪商たちの正の遺産に光をあててみよう。その近道は、「栃木の商業と金融」という切り口で豪商たちに寄り添って時代背景を探る事ではないか。

目　次

1．江戸から明治へ …… 2
1）問屋は村々を支配した
2）村々の反撃が始まった

2．明治前期 …… 3
1）いまよりオシャレな大通り
2）問屋の町は蔵の街
3）鉄道がやってきた
4）松方台風が吹き荒れて
5）産業革命の芽 ― 麻だけが残った
6）銀行が群生した

3．明治後期 …… 7
1）豪商たちの団結 ― 栃木商工会議所の設立
2）特産物から見た景況
3）麻農家と仲買人
4）商店街の形成

4．怒涛の25年　両大戦間の栃木 …… 13
1）個人商店から会社の時代へ
2）銀行の時代が始まった
3）長者番付にみる新興勢力の台頭
4）栃木の商業構造
5）麻の優位が崩れた
6）昭和恐慌がもたらしたもの
7）栃木にはプラスだった統制経済

5．終戦から現在までの経済スケッチ … 21
1）栃木の工業化を準備した戦時体制
2）地場産業はどこへ行ったのか
3）高度成長から長期停滞へ

むすび …… 23

1. 江戸から明治へ

1) 問屋は村々を支配した

江戸時代の栃木市には井筒屋をはじめ大きな力をもっていた大質屋がいた。渡辺屋清兵衛※は江戸でも知られた大質屋の一つだが、本業は肥料商であった。清兵衛は宝暦11年（1771）に肥料（糠・干鰯）代金の回収を急ぎ、栃木宿北部の村々（23ケ村の農家108名、債権額73両）を訴えた。その範囲は、現在の栃木市から鹿沼市・壬生町に及び、いまみても商圏の広さに驚く。今の栃木商工会議所の管轄区域を超えているではないか。

※渡辺清兵衛　屋号：渡辺屋。
　栃木町の上町（現在の万町）の商人。糠・干鰯・塩を扱った。
文化７年（1810）の記録では質屋として登場し、その年商は現在価値で１億3,500万円であった。

2) 村々の反撃が始まった

栃木町の明治維新は、維新以前に始まっていた。幕府による庇護のもとで江戸の商品を独占していた栃木町の豪商たちは、嘉右衛門新田村などの新興商人によって特権を脅かされていた。天保13年（1842）、嘉右衛門新田の岡田嘉右衛門※と麻屋茂兵衛（麻商）が立ち上がった。彼らは、新田※という名の新興地区の中に嘉右衛門河岸※（天海橋荷積場）を作った。これは、舟運を独占することで、流通を支配してきた栃木宿の横腹に穴をあける行為だった。これは法廷闘争になった。争いは周囲の村々を巻き込み、特に、西方・都賀地区の人々は嘉右衛門を支持した。肥料商渡辺屋清兵衛に借金を取り立てられた人たちである。栃木宿への不買運動があったのではないか。安政２年（1855）には嘉右衛門新田（家数140軒）、箱森新田（22軒）、大杉新田（現在の大町）（203 軒）と例幣使街道筋は町並み続きになったという。

明治維新を迎えると岡田嘉右衛門は大塚惣右衛門※の塩・塩魚の独占販売権（九十九里ルート）に異議を唱え水戸浜ルート(那珂湊)を切り開いた。この闘争では、嘉右衛門側が勝利し、栃木町の流通独占は揺らいだ。

※新田　耕地面積の増大を目的とした開発。
※河岸　江戸へ物資を輸送するための積み下ろし場
※岡田嘉右衛門　安政２年（1855）発行の『東講商人細見』によれば、質・油店と紹介されている。しかし明治維新までは代々畠山陣屋の代官を務めた旧家であったため、栃木宿と対立することが多かった。明治以降は石灰事業が主力。

※大塚惣右衛門と惣十郎　栃木宿中町の乾物問屋
　江戸からの乾物を独占し、岡田嘉右衛門と対立した。その子、惣十郎（1846 ～ 1906）は12歳から８年間、神田連雀町の魚問屋で修業したのち、家督を継ぎ、34歳で町議・38歳で郡議・45歳で町長・47歳で栃木商業会議所会頭となる。

2. 明治前期

1) いまよりオシャレな大通り

明治維新で誰でも資金と才覚があれば大通りに店を出すことができた。だから大通りの景色は江戸時代とは大きく変わった。明治４年には万町の橋田喜平が洋物店（舶来品）を開き、こうもり傘や帽子が買えた。倭町の中田注吉は文房具店、７年には菅谷甚平が活版印刷、石町の角正は肉屋、９年には鯉保が料理店を出した。パン屋もあったし牛乳も買えた。

大通りにガス灯 36 基が灯されたのは、明治６年である。江戸時代からあった肥料問屋や麻問屋にまじって文明開化の消費をになうオシャレな店が増えて行った。

明治の初めには多様な問屋が生まれた。江戸時代なら市日に大通りの店先に筵（ムシロ）を敷いて商品を並べるだけの市場商人が大通りに店を構える町場商人に昇格した事が想像できる。天秤棒を肩に軒先を回る棒手振商は明治末まで健在であった。

【第１表】明治前期の年表

明治　６年	栃木師範学校類似学校※設立
９年	栃木県庁設立
１０年	栃木師範学校開校・第四十一国立銀行設立
１３年	栃木自由党結成
１７年	地租改正・県庁宇都宮に移転※
１８年	栃木商工会設立・内閣制度発足 日本銀行、兌換銀行券発行
２２年	栃木町制施行　初代町長　根岸政徳
２３年	所得税法公布・商法公布 府県制・郡制公布・商業会議所条例公布
２４年	大塚惣十郎　第二代町長就任 栃木瓦斯会社設立 渡辺懐炉練炭製造工場　創業
２５年	栃木町初の町議員選挙・栃木貯金㈱設立

※栃木師範学校（類似学校）

栃木町には自由民権運動の流れがあった。その発端がこの類似学校（師範学校の前身）で、この学校は自由民権運動家の養成所とみなされた。栃木町から宇都宮へ県庁が移転された理由はいろいろ考えられるが、当時の三島県令（現在の知事）の自由党弾圧の動きから見て県庁移転の背景に、この類似学校・師範学校と自由民権運動を切り離す狙いが見える。

もしも県庁移転のあとでも、栃木師範学校（宇都宮大学教育学部の前身）が、残っていれば文化都市栃木の個性はより際立ったものになったことだろう。

※県庁の移転

明治17年の宇都宮への県庁移転は栃木町にとって、大きな経済損失であった。世帯統計でみると明治 14 年に 3,171 戸あった、栃木町の世帯数は移転後の22年には2,864戸と307戸も減少した。

2) 問屋の町は蔵の街

栃木は問屋町である。問屋とは卸売業である。小売業者に一駄（馬の背に乗せて運べる単位）で売る大口取引をした。あるいは、巴波川舟運を利用し、江戸の問屋に売った。支払いは現金ではない。手形（信用取引）である。ゆえに問屋の町とは掛け売りをする商人がいて、資金繰りを助ける大質屋のいる町でもある。金貸しを内部に組み込んだ町である。

大口取引を円滑に行うためには、大量の在庫を持つことが必要となり、倉庫を持つことになる。防火上、土蔵を持つことになり、問屋の町は蔵の街という外観になった。

明治10年代の栃木町（片岡如松撮影・片岡写真館提供）

3) 鉄道がやってきた

鉄道時代が到来した。明治20年に東北線が開業した。これにより巴波川舟運を利用していた干瓢（かんぴょう）は、石橋駅から東北線で消費地に運ばれることになり、まず干瓢問屋が特権を失い、大打撃を受けた。

明治 21 年には両毛線も開通した。巴波川舟運を独占していた舟積問屋の優位は消え、回漕業者の使命は終わった。

しかし、鉄道の開通により栃木町の経済は、かえって活気づいた。鉄道は舟よりも安く・早く・大量に・安定的に物資を運んだからである。実は巴波川舟運は農繁期には通行禁止であった。利水権は農民が持っていた。そこから自由になった。それゆえ、両毛線の誘致運動は栃木でも盛んであった。開通すれば足利・佐野・栃木・鹿沼の得る経済効果は大きい。産物の移出入額だけで 2,850 万円（現在の価値で1,140億円）以上と想定された。栃木では、坂倉重平（井筒屋）・白沢利平（板屋）・大塚利平などの金融業者と、善野喜平（釜喜）・望月磯平（古久磯）・大塚金兵衛（釜金）などの実業家、長谷川展・根岸政徳などの弁護士・政治家が請願書に署名した。

4) 松方台風※が吹き荒れて

栃木は問屋の町であり金融の町である。このことを一瞬照らし出した政策が、松方蔵相による所得税の導入である。所得税実施の噂で、栃木県の質屋数は明治20年の582店から21年に突然314店も減少した。しかし、所得税の詳細が明らかになった22年には640店に回復した。質屋数の異様な増減は、一時休業と再開と解釈するしかない。明治25年末の栃木町の質屋数は95店であった。この異常な多さは地主や豪商の副業としての貸付業が、所得税の課税対象となったため統計上、質屋業に分類されたためである。江戸時代から続く、隠れた金融業が所得税の実施により、あぶり出されたのである。

明治29年 3月には営業税が公布された。営業税は、いわゆる外形税であるため利益が無くても納税義務があり、小規模な質屋業は営業困難になった。こうして栃木町の質屋数は44年に20店となり、その後はこの水準で落ち着いた。

※松方台風
松方正義（1835～1924）が大蔵卿に就任すると徹底的な紙幣整理（1881～85）と財政緊縮を断行し、超インフレは収束し、逆にデフレ（不況下の物価下落）となった。
この間、日本銀行の設立（1882）、国立銀行条例の再改正（1883）、日本銀行の銀兌換銀行券の発行（1885）など金融制度の確立に務めた。

5) 産業革命の芽 ── 麻だけが残った

明治政府は、殖産興業政策の中心に製糸業を置いた。このため農家に繭の増産を奨励した。これに呼応し日本中のいたるところに桑畑が現れ、江戸時代の綿業地帯も養蚕業に転換した。この全国的な流れの中で、都賀地区は特異であった。麻を作り続けたのである。それは足尾台地特有の地質が麻の栽培に適しており、栃木の農家は麻を捨て養蚕業に転換する理由を見いだせなかったということである。勿論、農家の換金作物は麻だけではなく大豆･菜種･米･綿花･藍葉、黍箒草と多様であった。大豆は、味噌や醤油などの醸造業の原料となり、菜種は水油（行灯用）となり、絞りかすは肥料となる。ゆえに桜井肥料店は明治初期には水油商を名乗った。嘉右衛門町の油伝も昔は油商で天保の頃は、肥料を扱っていたが、味噌に特化した。

米は清酒の原料である。江戸時代の栃木町は関東の灘といわれるほど酒造業者が多く30店あったが､明治24年17店、明治30年には9店にまで激減した。綿花は、栃木白といわれた綿織物の原料である。とりわけ栃木白の染料となった藍玉※は、吹上村・皆川城内村に藍玉長者を誕生させるほど農家の藍葉生産は盛んであった。またこれに刺激されて国府村など各地に藍業者が誕生し、明治27年の同業組合規約によれば加盟戸数73戸の一大産地となった。しかし化学染料の普及に伴い明治末には消滅した。

※藍玉
藍染めの原料。藍葉を刻み発酵させた後、固めたもの。

6）銀行が群生した

新しく誕生した銀行は、この流れをにらみ、まずは肥料問屋・麻問屋・米問屋に資金を投入した。実はこれらの問屋が銀行業を経営し、銀行と云う新しい経営モデルを採用した。明治 10 年 10 月、栃木町に本店を置く、第四十一国立銀行が設立され、栃木の豪商たちが多数、同行に出資した。しかし、同行にあきたらず明治25年から32年の間に３つの銀行が設立された。全国的に見れば一つの町に商人系と地主系の２行が設立されるのが普通であるが、３行が生まれ、明治 40 年代にさらに２行が設立され、町内で生まれた銀行は全部で５行となった。

その上明治 38 年に大塚金兵衛（釜金）は東京神田に加満屋銀行、大正２年には望月磯平が東京巣鴨に京北銀行※を設立した。一つにまとめれば足利銀行と対抗できるだけの資金力を誇った筈である。しかし栃木商業銀行は室町の銀行として、万町の銀行としての栃木銀行と対抗したし、そこに肥料商や米穀商や麻商が分裂して加担したばかりか、のちに生まれた共立銀行、倉庫銀行でも業界内のライバル関係が持ち込まれた。

※京北銀行と望月磯平
大正６年上半期の営業報告書によれば、頭取望月磯平（第２代目）、専務取締役長谷川調七（現在の出井書店の創業者）、監査役山口平四郎（室町の材木商）の名がある。この三人は鍋山人車鉄道・栃木電灯・栃木瓦斯の創業でも協力した。
初代望月磯平は屋号を古久磯と名乗る和様銅銭商で明治 32 年には望月度量衡器製作所（資）を設立した。二代目望月磯平は第８代町長（明治 44 年３月～大正４年４月）となった。

【第２表】創立時の経営者

栃木銀行	資本金３万円	設立：明治２７年３月
頭　取：片山久平（米麻商） 取締役：中島重平（肥料商）・桜井源四郎（肥料商）他		
栃木農商銀行	資本金５万円	設立：明治２７年４月
頭　取：伊藤芳次郎（肥料商） 取締役：望月磯平（金物商）他		
栃木商業銀行	資本金２０万円	設立：明治３２年８月
頭　取：大塚金兵衛※（呉服商） 取締役：早乙女丈右衛門※（醤油商） 小池伝兵衛（味噌商）他		
栃木共立銀行	資本金１０万円	設立：明治４１年２月
頭　取：横山定助（麻商） 取締役：毛塚惣八（麻商）他		
栃木倉庫銀行	資本金１０万円	設立：明治４２年４月
頭　取：阿部幸七（米穀商） 取締役：本澤與四郎（肥料商）他		

※栃木銀行は栃木貯金㈱を改組したもの

※大塚金兵衛（1872 ～ 1944）
　呉服太物商「釜金」の六代目として生をうけ、栃木商業銀行の頭取、四十一銀行・栃木銀行の重役を歴任。33 歳で第三代会頭に就任し３期６年在任した。また、町会議員として町政に関与し栃木町経済界発展に大きく貢献した。

※早乙女丈右衛門（1858 ～ 1924）
　味噌・醤油の醸造、米雑穀商を営み、栃木米麻取引所理事長、栃木商業銀行取締役を歴任した。
　栃木商業会議所設立発起人の一人で、常議員・副会頭を経て大正２年、第五代会頭に就任。５期10 年在任した。

3. 明治後期

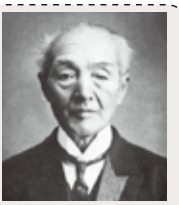
1）豪商たちの団結 ── 栃木商工会議所の設立

　明治18年に栃木商工会が設立されたが、工業（職人）との関係がうまくいかず、10 年遅れて明治 26 年に豪商中心の栃木商業会議所が設立された。発起人は、栃木の豪商達であった。彼らが栃木をリードしたことは、このメンバーから町長を輩出したことでわかる。

会議所初代会頭 ― 大塚惣十郎　（第二代町長）
四代会頭 ― 桜井源四郎※（第三代　〃　）

　発起人を業種で見ると、肥料店４人、麻・呉服・醤油店から各３人。また、町別には万町から 10 人、倭町から６人、室町から５人と大通りの豪商による運営が明瞭である。江戸末期に大通りと対立した嘉右衛門町からは３人。金物・肥料・繭糸。岡田嘉右衛門の名前は無い。その後発言力を増す泉町からは肥料商の舘野茂吉（釜平）がでている。「その他」の地域では城内町の醤油商、早乙女丈右衛門（第５代会頭）、片柳村の砂糖・茶商、小井沼熊吉、薗部村の生糸商、清水安平の名がある。

※桜井源四郎（1850 ～ 1920）
　万町の肥料水油商。栃木瓦会社、栃木瓦斯会社、栃木懐炉販売所などの創立にかかわり、栃木銀行の常務となる。明治 34 年３月から３期 10 年間、栃木町長をつとめ、明治 42 年から２期４年間栃木商業会議所の第四代会頭となる。



【第３表】設立メンバーの営業種目と所在地

	万町	倭町	室町	その他	計
麻商	1	1			2
肥料商	2			2	4
繭糸商		1		1	2
米穀商	1		1		2
呉服商		1	2		3
醤油商	1		1	1	3
乾物商		1			1
金物商	1			1	2
その他	4	2	1	4	11
計	10	6	5	9	30

2）特産物から見た景況

日清・日露戦争は栃木地区の大麻の弱点をさらした。これ以降、大麻※より皮麻※で出荷するか大麻を加工した真縄等の麻製品に転換することとなった。二つの水害は、農家を肥料代金の支払いで苦しめ、肥料問屋の資金繰りを困難にさせた。明治43年８月の水害は麻作に打撃を与え、金融危機は麻問屋をも巻き込んだ。このような背景の中で栃木共立銀行や栃木倉庫銀行が生まれた。

※大麻と皮麻
大麻とは麻の表皮を麻引きし、繊維だけにしたもの。
皮麻は表皮のままのもの（ニハギとも呼ばれる）

【第４表】栃木町の景況

明治	GDP	ＣＰ	大麻	皮麻	真縄	繭生糸	米	木材	干瓢	年表
25	-1.7									栃木貯金㈱設立
26	6.1									栃木商業会議所　創立
27	4.3									日清戦争
										栃木農商銀行設立
28	6.2		◎	◎		◎	◆	◎		足利銀行設立
29	-0.3		◆	◆		◆	◇			営業税公布
30	-2.2		◆			◎	◎			栃木瓦斯設立
										鍋山人車鉄道設立
31	4.8		◆			◎	◎		◆	第四十一国立銀行普通銀行に
32	6.0		◎			◎				栃木商業銀行設立
										下野貯蔵銀行栃木支店設立
33	-1.9	0.0	◆			◆	◆			
34	3.8	-2.2								
35	-1.3	-3.9						◆		栃木町大水害
36	1.0	5.0	◎	◆		◎	◆	◆	◆	
37	10.1	2.3	◆					◆		日露戦争
38	-3.8	3.9	◎		◎	◇	◆		◆	
39	-0.8	2.0	◆	◎	◎	◎		◆		
40	5.2	10.5	◆	◎	◎	◎		◎		栃木大火
41	1.9	3.1	◆	◆	◎			◎		栃木共立銀行栃木に移転
42	3.4	3.9	◎	◆	◎		◆	◆		栃木倉庫銀行栃木に移転
43	5.5	0.3	◎	◎	◎			◆		栃木町大水害
										栃木倉庫銀行設立
44	2.6	7.4								粟野銀行栃木支店設立
45	-3.2	5.5								明治天皇崩御

※①記号について（◎）好況　（◇）後退期　（◆）不況
②３４・３５年は大洪水のため記録なし
③ＧＤＰ（国内総生産）・ＣＰ（消費者物価指数）

3）麻農家と仲買人

明治21年､栃木町には112店の問屋があった。問屋とは別に、仲買人がいたのは麻業界だけである。しかも60店もあった。異常に見える。しかし栃木の独自性を表した数字である。なぜなら麻という商品は投機商品であり、同じ投機商品の繭や生糸と違い３年手元に置いても商品価値は劣化しない商品である。このことは麻農家が売り急ぎをせず、３年間は高値を待って売ることが出来たということである。農民は安値で買いたたきたい問屋と対抗できたのである。問屋はしたたかな農民との商談を同じ農村に住む仲買人に委ねることになり、仲買人の数が多くなったのではないか。栃木町の主要産物の移出入統計を見ると、明治28年の麻の移入は63万貫※･移出は16万貫であった。生産地なのに、麻の移入が移出より多い不思議さ。これは栃木町は鹿沼など上都賀郡の麻を移入し、巴波川経由で江戸へ移出していた時代からの商習慣で栃木町の加工業者が原料として移入し製品として移出したからである。また、移出されるものが当年度産とは限らない。移出高の増減は価格を反映し、当年度の収穫高を必ずしも反映しないのである。主要産物の移出額を比較すると、麻が米を上回り１位である。これに比べて繭や生糸の移出入は少なく、栃木町では主要産物とはならなかった。この結果、繭・生糸問屋は大通りから去り、商店街は質的には変化した。大通りの商人の入れ替えが進んだ。大正から昭和に至る激動期の中で盛衰が明らかとなった。

すなわち、【第５表】の①欄は、長者番付（大正 11 年)､②欄は配当収入（大正 15 年）であるが､③欄の会議所発起人（明治 26 年）が①･②から脱落し始めている。

※万貫とは、尺貫法による重さの単位。　１貫＝3.75 kg

【第５表】大通りの豪商（明治 40 年）

①	②	③	業　種	豪　商
		◎	（肥料）	櫻井源右衛門
21			（呉服）	安達幸八
16			（酒類）	清水安平
30	D		（麻）	巻島惣八〈村田屋〉
	D		（麻）	横山定助〈真鍋商店〉
	C	◎	（質屋）	白沢利平
		◎	（麻）	黒川伝八
		◎	（糸綿）	小林宗平
9	D		（麻）	阿部清八
	D		（質）	善野佐次平
38	D	◎	（肥料）	菅谷甚平
		◎		第四十一銀行
3	D			善野伊平〈釜屋〉
39			（洋物）	中田注吉
65			（紙類）	橋本五郎平
35			（雑貨）	石原豊吉
11	D	◎	（麻）	坂本重蔵
15		◎	（呉服）	大塚啓吉
25	D		（材木）	山口平四郎
	D	◎	（米穀）	中島重平
		◎	（呉服）	大塚金兵衛

大通り

①	②	③	業　種	豪　商
28	D		（薬種）	高田安平
		◎	（米穀）	阿部幸七
1	B	◎	（麻）	毛塚惣八
38			（麻）	佐藤海太郎
21			（乾物）	片柳繁蔵
	C	◎	（麻）	伊藤善次郎
		◎	（金物）	望月磯平〈古久磯〉
37		◎	（薬種）	谷　七平〈大津屋〉
53			（旅館）	志鳥半平〈金半〉
29			（麻）	田村金五郎
23			（呉服）	丸山治平
		◎	（足袋）	佐藤調平
7			（肥料）	本沢与四郎
63			（糸綿）	佐山栄三郎
	A	◎	（砂糖）	伊藤芳次郎〈釜芳〉
13			（紙類）	上原忠平
31	D	◎	（醤油）	善野喜平
38			（金物）	平間友吉
51			（薬種）	金沢小兵
31			（乾物）	山本貞次郎
11			（酒類）	井上留吉〈堺屋〉
12			（紙類）	毛塚源蔵
42			（書籍）	城山常次郎〈城山堂〉
59		◎	（呉服）	波多野仙吉
	D		（材木）	荒川瀧之助

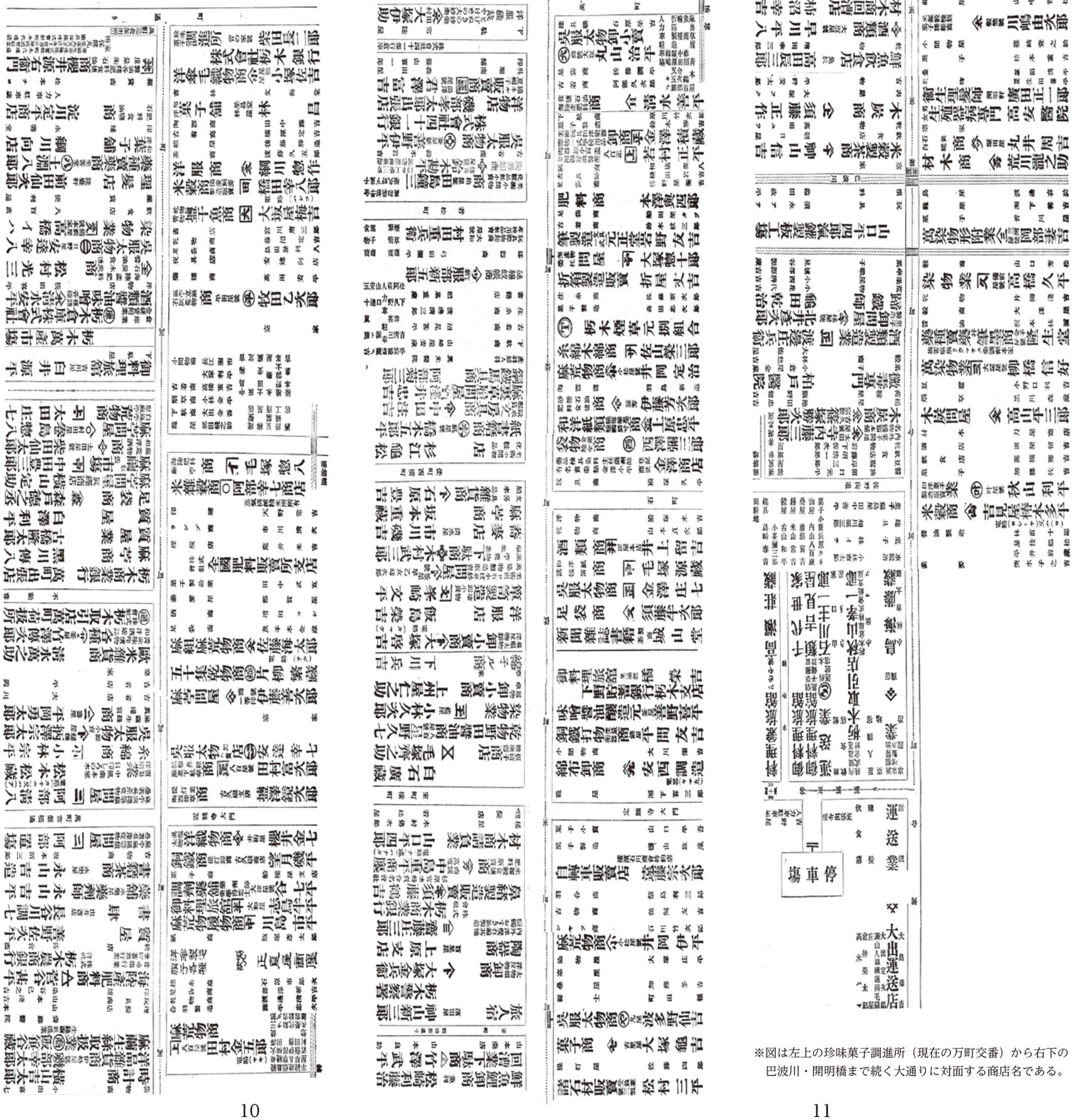
●資料：『栃木県営業便覧』明治40年
※①営業税納付番付
※②配当収入
A　5万円以上　B　3万円以上
C　2万円以上　D　1万円以上
※③商業会議所発起人

※大通り以外の豪商

①	②	③	業　種	豪　商
10	D		（木材）	塚田幸四郎
2	C		（肥料）	大塚賢三郎
	D		（砂糖・茶）	小井沼熊吉
8	D		（酒造）	星野宗吉

①	②	③	業　種	豪　商
19	D		（醤油）	早乙女丈右衛門
20			（仕出し）	毛塚庄三郎

【図 1】明治40年の大通り商店図



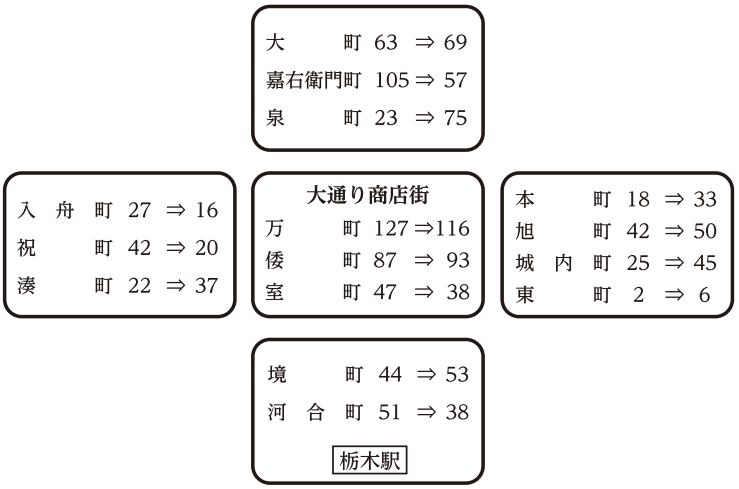
※図は左上の珍味菓子調進所（現在の万町交番）から右下の巴波川・開明橋まで続く大通りに対面する商店名である。

4）商店街の形成

栃木宿の木戸は、南は開明橋・北は今の万町交番・東は今の文化会館あたり・西は幸来橋（江戸時代は念仏橋と云った）の４カ所で、夜間は閉鎖されていた。この木戸内の中心は今の大通りにあたり、ここで商いをする人たちをメジャーと考えていた節がある。周辺の商人の中から大通りに店を出す者もあり、大通りの商人も運が悪ければマイナーに落ちた。

栃木町の最盛期は明治40年頃だろう。このころ【図１】には、商店が大通りから周辺に及び【図２】、その後の30年間（昭和16年）、際立った増加をみせていない。むしろ減った町もあった。大通りでも明治40年に261店あったが、昭和16年247店と減っている。

【図２】商店街の形成



明治20年代の栃木町（片岡如松撮影・片岡写真館提供）

4. 怒涛の25年　両大戦間の栃木

第一次世界大戦から第二次世界大戦までの25年間は文字通り怒涛の時代であった。時代は奔馬のごとく揆ね（戦争景気）突然急停止（反動恐慌）し、前のめりに倒れ込み（昭和恐慌）、また急加速（統制経済）した。【第６表】
冷静に乗りこなした者はいなかった。生き残った者は運が良かっただけである。そんな時代であった。

1）個人商店から会社の時代へ

第一次世界大戦は、日本に戦争景気をもたらした。栃木町にも波及し、商品が売れに売れ生産力の増強が必要だった。このため有力な個人商店は、大正６年～15年にかけて合資会社や株式会社化を急いだ。会社化した個人商店は 19 社。それに必要な資金額は 117 万円となる。会社化の動きはその後も続き、昭和２年から３年までは更に12社が会社化し、必要資金額は82万円となった。合計で 229 万円である。起業ブームの時代が来た。その例を挙げれば、木材業で４社・運輸業で４社･金銭貸付業※で５社となり、栃木の貨物が増え、木材の移出高は、大正５年に 2,000 トン以下であったが、大正 10 年には 5,300 トン、大正 12 年には 6,000 トンを超え、かつ移入高も 4,500 トンとなり運転資金の増強が不可欠であった。

また、質屋や金銭貸付業も自己資金の不足に直面し、善野佐次平は証券会社と無尽（栃木銀行の前身）を興し、白沢禎は不動産会社を興した。米投機の会社も生まれた。豪商大塚賢三郎は資本金５万円で栃木米穀委託㈱を興した。三大豪商の一つ釜金は大正 13 年に（資）大塚商会（10 万円）に転換し、釜芳は昭和２年に㈱釜芳商店となった。なお、善野三家の一つ釜喜は大正 11 年に栃木塩元売捌会社（５万円）を設立した。

ところが、麻問屋の会社化は嘉右衛門町の２社に留まり、大通りの麻問屋は動かなかった。これは、麻の移出高が大正期に 2,000トンレベルで低迷し、大正 11 年以降では 1,000 トン台に低下したためで、在来型の個人商店に止まったままでもその場はしのげたからである。

※金銭貸付業と銀行の違い
　金銭貸付業は自分の金を貸す。銀行は預金を集めて貸す。金銭貸付業は自分の金を危険を冒して貸すゆえに高い金利を要求する。銀行は近代社会で形成される社会的平均利潤率（普通の人が普通に商売すれば１割は儲かるというような）を参考にして利子を決める。預金利子はそれ以下となる。

【第６表】大正・昭和の年表

暦	GDP	CP	時　代　背　景
大 正３年	1.2	-7.9	第一次世界大戦始まる　株価大暴落
４年	6.1	-6.1	中国に２１ヶ条約の要求
５年	7.1	8.0	憲政会結成　・巴波川氾濫
６年	7.7	22.7	ロシア革命　・栃木で会社化ブーム
７年	7.9	31.6	シベリア出兵　・米価高騰で米騒動
８年	5.2	33.1	中国で反日運動　・３年連続のハイパーインフレ
９年	0.3	4.6	反動恐慌　・伊藤銀行取付騒ぎ　・京北銀行廃業
１０年	2.5	-8.4	ワシントン会議　・原敬首相暗殺
１１年	1.1	-1.5	海軍制限条約　・不況の慢性化
１２年	-3.8	-0.9	関東大震災　・３年連続のデフレ
１３年	2.9	0.9	小作調停法公布
１４年	5.8	1.2	普通選挙法公布　・栃木銀行と栃木商業銀行の合併
１５年	0.8	-1.5	大正天皇崩御　・加満屋銀行営業停止
昭 和２年	5.1	-1.5	昭和恐慌　・山東出兵　商工会議所法施行
３年	1.7	-3.8	栃木商工会議所に改称　・南関門道路開通
４年	-0.1	-2.3	世界恐慌　・東武浅草線開通　・太平山観光開発 ※
５年	1.7	-10.2	栃木銀行取付騒ぎ　・足利銀行の栃木倉庫銀行買収
６年	3.3	-11.5	満州事変　・東武宇都宮線開通
７年			５.１５事件　・栃木共立銀行廃業　・北関門道路開通
８年			国際連盟脱退
９年			太平山遊覧道路完成
１０年			栃木農商銀行 ※と足利銀行の合併
１１年			２.２６事件　・栃木銀行廃業
１２年		7.8	日支事変　・栃木市制施行
１３年			国家総動員法公布　・巴波川氾濫
１４年			第二次世界大戦勃発

※太平山観光開発
東武線開通の際、東武から桜が寄付され、失業対策として何度も手掛けている栃木町の宿題である。
※栃木農商銀行
栃木農商銀行は一時、栃木伊藤銀行と改称した。

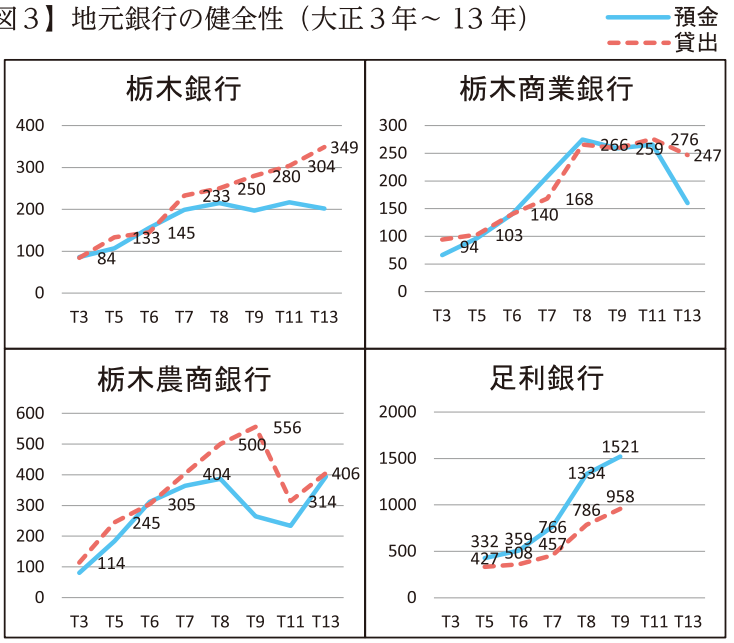
2) 銀行の時代が始まった

個人商店の起業化・会社化のための資金需要は前頁の通り229万円であった、この巨額な金をどう調達したか。例えば、両毛印刷が 20 万円・栃木綿業も 30 万円の資本金である。この両社の資本金は当時としては群を抜いていた。ちなみに大正 3 年設立の栃木商業銀行の資本金が 20 万円で、大正 14 年の栃木銀行が 30 万円、両行ともその後、増資をしているが両者の資金需要を満たす余力はない。もちろん銀行に余力があっても地方企業の株式に応募することはない。不健全な投資とみなされよう。ただ、株式を担保に貸し付けることは出来た。大蔵省の検査で発見されれば警告を受けただろうが、この時期にはまだ全国的に普通に行われていたから。

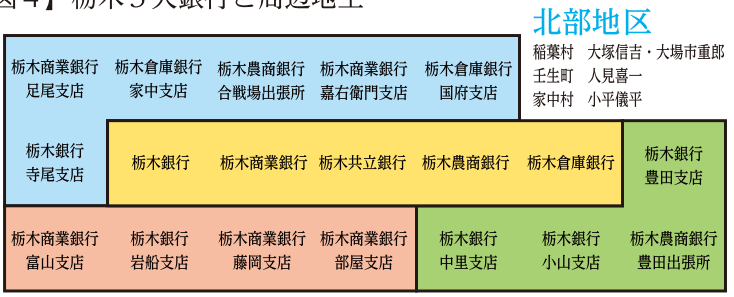
会社化に後れを取り、これまで通りに銀行融資に頼り価格変動で損失を拡大した麻問屋や米問屋が多かった。

この結果、銀行は救済融資に追われ不良債権が増え、苦難時代が始まった。取付の危機である。当時の銀行の営業報告書をたどってみよう。栃木の三大銀行の預金合計額は大正５年末で609万円である。229 万円の資金需要に応えられる預金量ではない。それにもかかわらず大正６年以降、三行の貸出額は急速に増加している。【図 3】に見る通り、オーバーローン（貸出額が預金額を大幅に上回っている）の銀行は、栃木銀行と栃木伊藤銀行（のちの栃木農商銀行）であった。このため両行にとって預金増強が不可欠となり明治末から豊かな地主層【図 4】をターゲットに支店網を拡張させ、大正２・３年からはその動きを加速化した。

【図３】地元銀行の健全性（大正３年～ 13 年）



【図４】栃木５大銀行と周辺地主



北部地区

稲葉村　大塚信吉・大場市重郎
壬生町　人見喜一
家中村　小平儀平

西部地区

富山村　白石荘蔵（商銀常務）・佐藤章治
藤岡町　岩崎為三郎（商銀常務）
　　鈴木吉蔵（商銀監査役）・岩崎清七
水代村　赤沢喜兵衛

東南部地区

豊田村　柏瀬善十郎・船田武雄・倉持正之助・野口 喬
小山村　小林次郎・小池新作・鵜飼佐市・石崎政一郎
間々田町　小川善平・柿沼熊蔵

※共立銀行に支店は無い

栃木町室町付近（大正８年）

栃木商業銀行は創立時から地主層を経営陣に巻き込んでいた。しかし、預金増には結び付かず、大塚頭取はもう一つの銀行を東京に作った。この銀行は加満屋銀行といい、預金残高は大正７年末で136万円あったから、東京進出は成功であった。これに対して、京北銀行の預金残高は同年末に16万円にとどまり、東京進出は失敗だった。

足利銀行は大正５年末の段階では預金額は427万円であり栃木の３銀行の上をいく存在だった。しかし大正９年末には３銀行預金額合計の671万円の２倍強1,520万円となり、別格の存在となっていた。

栃木共立銀行と栃木倉庫銀行の大正５年末預金額は、共立53万円・倉庫21万円である。資本金は２行とも10万円にすぎず、大蔵省が目指した行政指導の水準（最低資本金100万円）をはるかに下回っていた。

栃木町倭町付近（大正８年）

3）長者番付にみる新興勢力の台頭

業種毎に勝者が生まれた。【第６表】に見る通り第一次世界大戦は、日本に空前の大好況をもたらし、栃木町にも果実をもたらした。大正９年の反動恐慌により、栃木の豪商の中から衰退するものが現れた。【図５】の長者番付に示すように大正15年には、新興勢力が番付に登場した。味噌・履物・真縄などの業種からである。麻・肥料の従来型業種でも優劣の法則が動き、大戦景気を乗り切った者・足元をすくわれた者が現れた。たとえば、大塚金兵衛（釜金）は大正３年に７位であったのに震災後の大正15年には116位となった。

【図 5】新興勢力の登場 長者番付の変遷（所得税）

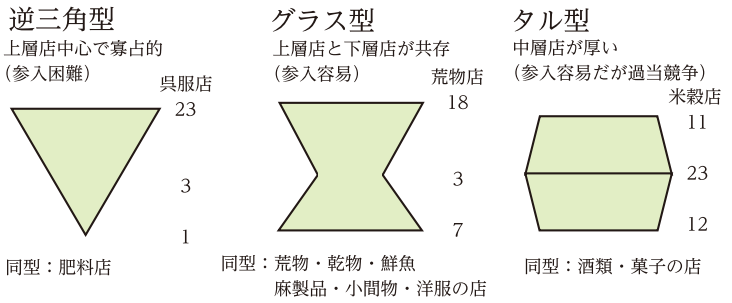
順位	大正8年　（氏　名）	所得税		順位	大正15年　（氏　名）	所得税
1	伊藤芳次郎〈釜芳〉（肥料・砂糖）・倭町	5,668	➡	1	伊藤芳次郎〈釜芳〉（肥料・砂糖）・倭町	7,129
2	大塚利兵衛（金銭貸付）・万町	4,503	⬇	2	毛塚惣八（麻）・万町	3,128
3	毛塚惣八（麻）・万町	2,401	↗	3	白沢禎〈板利〉（貸付）・万町	1,980
4	阿部幸七（米穀）・万町	2,206	⬇	4	本澤與四郎（肥料）・倭町	1,643
5	善野伊平〈釜伊〉（呉服）・倭町	1,448	↘	5	荒川瀧之助（荒瀧）（材木・貸付）・室町	1,505
6	星野宗吉（酒造）・祝町	1,362	⬇	6	伊藤善次郎（釜喜）（麻）・万町	1,448
7	大塚金兵衛〈釜金〉（呉服・貸付）・室町	1,233	⬇	7	舘野惣吉（釜平）（履物）・泉町	1,436
8	白沢禎〈板利〉（貸付）・万町	1,206	↗	8	善野伊平〈釜伊〉（呉服）・倭町	1,359
9	荒川瀧之助（荒瀧）（材木・貸付）・室町	1,091	↗	9	鳥海藤蔵（味噌）・河合町	1,207
10	中島重平（万釜）（米穀・貸付）・室町	1,068	⬇	10	坂本重蔵（釜重）（真縄）・倭町	1,193

11位　星野宗吉（酒造）
17位　中島重平（米穀・貸付）
21位　大塚利兵衛（金銭貸付）
116位　大塚金兵衛（呉服・貸付）

4）栃木の商業構造

大正 14 年度の栃木税務署「管内国税営業者業種別納税額及び人員」によれば営業納税者を業種別に 3 つに分類している。20 円以上・10 円以上・10 円未満の 3 分類である。主要業種の商業構造を見ると 3 つのタイプが検出できる。【図 6】に見る通り呉服商・肥料商は逆三角型で、20 円以上の納税者が多く、10 円未満の下層店は極めて少ない。寡占状態であり参入障壁が高いことがわる。資金力のある豪商のみが生き残った。上層と下層が共存し、中層が少ない業種もある。いわゆるグラス型である。栃木町ではこのタイプが一番多い。麻・荒物や乾物・鮮魚・小間物・洋物などであり、このタイプは仕入能力が業績を左右する。第三の型は、タル型で中層店が多く、参入は容易だが過当競争に陥りやすい。米穀・酒類・金物・薪炭・菓子店などがこれにあたり、豪商は生まれにくい。

【図 6】栃木町の商業構造（大正 14 年）



※国税課税額：上段20円以上、中段10円以上、下段10円未満

5）麻の優位が崩れた

納税額からみると呉服・米穀・肥料がベスト３である。しかし麻と荒物を合計すれば 2,590 円となり肥料を越えて３位となる。また麻裏草履 142 円、カイロ灰 184 円を加えると 3,216 円となり首位となる。

【第７表】大正 14 年度業種別納税額　上位 10 業種

位	業種（店数）	円
1	呉服（２８店）	2,952
2	米穀（７０店）	2,825
3	肥料（４５店）	2,025
4	砂糖（４店）	1,770
5	荒物（２１店）	1,431
6	酒類（３９店）	1,227
7	麻　（３１店）	1,159
8	材木（１８店）	1,054
9	味噌（４店）	1,016
10	運送（９店）	902

※銀行業（11,260 円）は除いた。
※( ) 内の数字は営業税 10 円以上の事業数である。

とはいえ麻関連業は、大正 11 年から衰退した。このため栃木商業会議所は各地に視察団を送り、問題点を探った。その報告書によれば麻業界の課題は、

①下野麻は脆弱（魚肥から安い硫安に切り替えたため）
②低価格で強靭な中国麻との競争
③岡山地方への皮麻、広島地方への大麻、名古屋・大阪への真縄が亜麻・黄麻に転換
④下野麻が、広島・岡山両県でも栽培され安定供給された。
⑤栃木に同業組合が無いため製品の質にむらがあり供給が不安定であるばかりか、価格の乱高下が激しい
⑥服装が洋風化し、草履や下駄の需要が減り、ゴム靴が普及してきた。

こうして下野麻の優位は崩れた。

6）昭和恐慌がもたらしたもの

昭和恐慌は昭和２年の金融恐慌でよろめいた日本経済が、1929 年の世界恐慌で叩きつぶされた長期不況を意味する。栃木町の産業は、農業を含め大打撃を被り栃木駅から移出されていた主要産品もカイロ灰※を除き激減した。この影響は、農家の所得を減少させ大通りで呉服や洋服を売る店が、まず疲弊した。金融恐慌で不信感を高めていた地元銀行は昭和５年まではかろうじて世界恐慌の荒波に耐えたが、廃業するか足利銀行に吸収されるしかなかった。

※カイロ灰とは、懐炉用の燃料。
　現在の使い捨てカイロの中身は酸化鉄であるが、昔の燃料は、桐などの木炭末に麻殻（オンガラ）を焼いた灰（懐炉灰）を混ぜ、助燃剤を加えたもの。

栃木町倭町付近（昭和７年）

7）栃木にはプラスだった統制経済

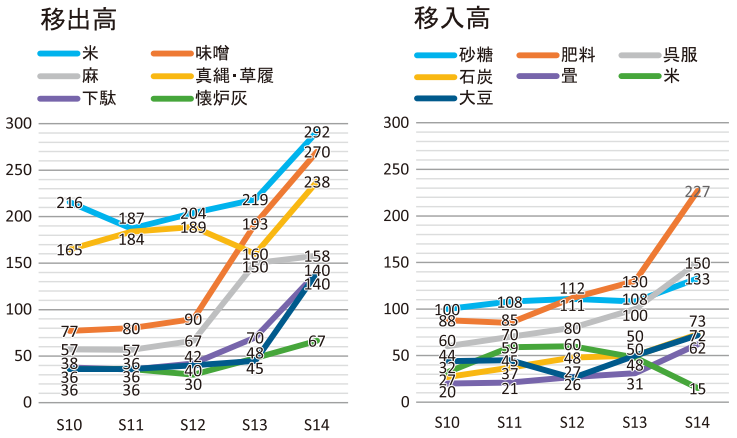
栃木町が昭和恐慌の影響を脱するのは昭和 12 年頃である。移出高でみると米・味噌・真縄※が伸び、麻は主役の座から降りている。

景気の回復を如実に示すのは【図７】の移入高である。ゼイタク品の呉服が昭和 10 年の 60 万円から 150 万円と 2 倍強となり、移入高で砂糖 133 万円を超えて第 2 位となった。移入高のトップは肥料であった。昭和 14 年の移入高は 227 万円であり、昭和 10 年の 88 万円の 2.6 倍である。ところが昭和 12 年 7 月に日支事変が始まり、翌 13 年には国家総動員法が公布され日本は統制経済体制となる。これより早く昭和 8 年には米穀統制法・10 年には重要肥料統制法が公布され統制経済が始まっていた。したがって 13 年には綿糸・ガソリン・鉄鋼・石炭が配給制となり、14 年には木炭、15 年には小麦粉・米穀・砂糖と続いた。しかしこのような統制下でも栃木町の主要産業は麻関連業種を中心に生産量を伸ばした。たとえば真縄は昭和 3 年に比べ 17 年は 1.9 倍、石灰は 4.2 倍、味噌は 3.3 倍、懐炉灰は 2.4 倍、瓦は 1.8 倍であった。

【第 8 表】は昭和 16 年～ 17 年の生産高に占める麻関連品のウエイトを見たものである。麻関連品が 16 年で 52%、17 年で 61%で戦時下の重要物資であったことが判る。

※真縄とは、芯縄ともいう。下駄の花緒の芯になる麻の繊維束。

【図 7】栃木駅の移出入高（昭和 10 年～ 14 年）



【第８表】統制時代の主要産物

	１６年		１７年	
	万円	%	万円	%
真縄	288.0	13.7	350.0	12.3
草履	202.5	9.6	240.0	8.4
懐炉灰	260.0	12.3	375.0	13.1
下駄	115.2	5.5	348.0	12.2
下駄生地	180.0	8.5	350.0	12.3
麻ロープ	50.0	2.4	70.0	2.4
小計	1,095.7	52.0	1,733.0	60.7
箒	50.0	2.4	75.0	2.6
味噌	320.0	15.2	400.0	14.0
石灰類	280.0	13.3	320.0	11.2
瓦	25.0	1.2	35.1	1.2
練炭	150.0	7.1	150.0	5.3
その他	185.0	8.8	140.0	5.0
計	2,105.5	100.0	2,853.1	100.0

栃木町倭町付近（昭和７年）

5. 終戦から現在までの経済スケッチ

1）栃木の工業化を準備した戦時体制

太平洋戦争が始まった昭和16年に、栃木税務署より発表された管内業種別個人営業者数によると、工業者数は50社であったが、昭和21年の栃木商工会議所の会員名簿には203社が記載されている。

戦争が終わって、突然多くの工場主が出現したわけではなく、昭和16年以降に軍需工場が急増したのである。地元資本から工場に発展したものや、市の誘致により、疎開してきた工場が戦後も残った。こうして戦争は栃木に工業化をもたらした。戦後の工場は、特産物91社・醸造業9社・鉄工業34社・木工業31社・その他の工業38社であった。

戦前には、商業者中心で動いていた栃木商工会議所の会頭に、初めて工業者が就任したことは、工業時代の到来を告げる人事であった。

※丸山治平（1898 ～ 1987）
万町の呉服太物商「大治」の養子となる。
昭和18年6月㈱呉光製作所を設立し、代表取締役に就任した。栃木地区金属機械工業会を設立し2代目会長となる。
昭和22年6月から2期4年間、栃木商工会議所の第八代会頭となる。

2）地場産業はどこへ行ったのか

戦前からの栃木の特産物産業（地場産業）である履物は、昭和33年頃までに全国的なモノ不足と戦災に遭わなかった幸運によって一大飛躍を遂げ、日本の三大産地の一つになった。

履物業界から栃木商工会議所会頭が出たのも初めての事である。しかも木戸内ではなく泉町からである。

※大谷新吉（1902 ～ 1993）
泉町の下駄製造・履物商を営む商家に生まれ、浅草「松田商店」で履物商の修業をしたのち、家業に従事。栃木県履物商工業（協）理事歴任後、理事長に就任。昭和26年5月から4期7年間、栃木商工会議所の第九代会頭となる。

戦前の慣行が崩れた人事であった。しかし、下駄から靴への転換が日本中で進み、原料は麻から化学繊維に代わり、麻関連産業は衰退した。

この停滞は、栃木の農業を米作依存型の普通の農業に変えた。麻農家の減少は、麻問屋ばかりか肥料問屋を衰退させ、

農家の収入減は、呉服商など大通りの華やぎを演出した商店の力を弱めた。全盛期の好循環が消え、大通りの景観も変化した。その上、農業協同組合（JA）が力を増し、米と肥料の市場を奪った。野球で言えば３番（麻）・４番（米）・５番（肥料）のいないチームとなった。

豪商の存在基盤であった農業(農村)との関係が切断された。

3) 高度成長から長期停滞へ

日本の高度成長時代が始まった。この中で戦後いち早く走り出した工場群はどうなったのか。昭和 30 年から平成 19 年までの半世紀の軌跡を、スケッチしてみよう。

まず戦前にルーツを持つ軽工業として、①食品、②衣服・身の回り品、③木材・木製品、④家具・装飾品の四種をあげ、その工場数を合計すると、昭和30年から平成19年の間に475から43工場に激減している。

一方、高度成長期※を代表する工業として①金属、②一般機械③輸送機械、④電気・器具の四種をみると、その工場数は同期間に28社から465社と激増している。しかし出荷額でみるとこの間、単純に一直線に成長したわけではないことが分かる。すなわち電気機械と金属製品、の出荷額は100億円を割っている。輸送用機械も平成15年を境に低下し、ピークの500億円から下がり続けている。一般機械も低下し200億円を割った。つまり工業都市化への途は壁に突き当たっているという結論になる。

※高度成長期とは、①家庭の三種の神器といわれた白黒 TV、洗濯機、冷蔵庫の普及率が 100％に達する時期。②３Ｃブームと言われれたカラー TV、クーラー、乗用車の普及率が 100％に向かう時期の二つに分けられる。この二つのブームを演出したのが家電機器産業と自動車産業であり、高度成長のリーディング産業といわれた。

この流れの中で、栃木の工場は日立製作所大平工場と日産自動車工業上三川工場の下請工場ないし孫請として系列化されており、親会社の景況に左右されてきた。

むすび

昭和60年、栃木市は中小企業庁の商業近代化地域計画策定事業に指定され、それ以降まちづくり運動が本格化した。報告書が翌年作成された。

その骨子は近代化地域を駅前商店街・銀座通り商店街・大通り商店街の3地点とし、それを貫くルートを2本立てにしたことである。大通りとミツワ通りを一体化し、来街者がこのルートを還流することを目指した。このとき福田屋百貨店の誘致は織り込み済みであった。しかし反対があり開店が遅れ昭和61年5月にジャスコ栃木店が先に開店し、福田屋百貨店の開店は平成2年2月となった。

ようやくこの核店舗を中心にシンボルロードが完成し、商店街復活の装置は出来上がった。だが、ソフトと云える町のエネルギーは無かった。福田屋百貨店は平成23年に撤退した。

昔、豪商たちは私財を投げうって山車を買い、祭りを盛り上げ、結果として、街全体が不思議な力で動き出した。豪商たちは目先の売り上げに拘らず、率先、遊び心を発揮したのではないか。だからこそ人は楽しみ豊かな気持ちになって未来を構想し、街は動いた。

いまも大通りにはジャスコやロードサイド店にはない生活と文化がある。「負ける筈がないではないか」と云う豪商たちの声が聴こえる。

参考文献

・『栃木県史』
・『栃木市史』
・『栃木市統計書』
・『栃木市要覧』
・『下都賀郡誌』昭和９年２月
・『全国商工人名録』明治 31 年 12 月
・『全国商工人名録』大正３年５月
・『現代之栃木』明治 44 年　松下吉平著
・『栃木商工会議所百年誌』平成５年
・『栃木商業会議所月報』大正６年～昭和３年
・『栃木県営業便覧』明治 40 年
・『北関東における一封建都市の研究』昭和 34 年開成館　日向野徳久著
・『栃木町の金融変遷史』平成 26 年　石崎常蔵著
・「商人地主の成立」1・2『国学院商学（第５号 平成８年）・
（第７号 平成 10 年)』　飯田晶夫著
・『物価の文化史』平成 22 年　展望社　森永卓郎監修

豪商の物語り「栃木の商業と金融」

平成 28 年 10 月 31 日発行

編　集　　栃木商工会議所
　　小冊子編纂委員会
　　（金融税務委員会・産業振興委員会）

発　行　　栃木商工会議所
　　会頭 大川吉弘

〒328-0053
栃木県栃木市片柳町２－１－46
電 話（0282）23－3131
ＦＡＸ（0282）22－7550

栃木勉強家壽語六

明治三十四年十二月廿九日印刷 明治三十五年一月一日發行

編輯者 栃木縣栃木町百四十三番地 小倉壽十郎
發行者 栃木萬町三丁目九十五番地 宮川庸三郎
撮影者 寫眞師 栃木泉町 山崎德之助
小川一眞製版印刷

栃木商工会議所